
二重人格な妹と一重人格な兄

笹川 猫ノ介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二重人格な妹と一重人格な兄

【Nコード】

N0372Y

【作者名】

笹川 猫ノ介

【あらすじ】

俺、こと静雄の妹は猫が超大好きな中学生。

明るくて、やさしくて、料理が上手で、成績は上の上。

色白で髪が長くてなんたら48なんかよりもずっと可愛い最高の妹。

俺のことを「お兄ちゃん^^」って呼んでくれる超可愛い妹。

天使のような俺の妹はある日、突然倒れて——……

「死ね！死んでしまえ！！」

1

不知火^{しらぬい みよこ} 美世子^{みよこ} 13歳 白仙村^{はくせんむら}村立白仙中学1年生白仙村^{はくせんむら}在住

不知火^{しらぬい しずお} 静雄^{しずお} 19歳 ———— NO DATE ———— 白^{はく}

仙村^{せんむら}在住

清崎^{きよさき} 圭介^{けいすけ} 年齢不詳 白仙精神病院^{はくせんむら}所属白仙村^{はくせんむら}在住

音無^{おとなし} 麻衣^{まい} 12歳白仙村^{はくせんむら}村立白仙中学1年 白仙村^{はくせんむら}在住

作中に登場する人物、およびに団体名や事件はすべて架空のもので
す。

妹萌えな兄

「おきてーお兄ちゃんー」

柔らかい妹の声で目が覚める。

薄く目を開け、美世子を見る。美世子は茶色のメガネの奥から俺の顔を凝視している。

さして、怒っているようでもないので俺はグルツと布団を巻き込み美世子に背を向ける。

たまたま目に入った赤い時計の長針が6、短針が8を指していた。ああ、そうか。夕方まで寝てたんだ。それで妹が起こしたんだ。

「お兄ちゃん、朝の6時だよ？」

「どっええええええええええ!!???:?」

俺は叫んで、布団から飛び起きる。

窓から明るい朝日が差し込んで、今日は絶好の洗濯日和。

頭の中に浮かんだ19歳らしくない思いを振って払い、弁当のことに意識を戻す。（これも19歳らしくない？）

「美世子！昨日俺はご飯を炊いたな！？冷蔵庫にダシ巻きとワインナーあったよな！？」

現在6時。美世子が電車に乗るのは7時10分。

それまで30分。

俺が弁当を作っている間に美世子は着替え。

いや、駅までやく5分。7ごろに家をでないと時間がない。

20分。まずご飯を弁当に詰めるのに1分。ウインナーを焼くのに8分。ダシ巻きをチンするのに3分。

それで約12分。

美世子の着替えなら3分でもできる。

「……？」

美世子は俺の考えも知らずに、キョトンとした顔で俺を見ている。

いつもなら、それが可愛らしくて頭を撫でたりするのだが、今日は生憎時間がない。

「……お兄ちゃんは何を勘違いしてるのかは知らないけれど、今日は土曜日だよ？文芸部は部活ないし」

「うっそ!？」

驚愕する俺に美世子はポケットから取り出したケータイを開いて、日にちを見せる。

確かに、土曜日。

「……ハア」

安心し、俺はため息を漏らす。

「お兄ちゃんは慌てんぼさんだにゃー。昨日一緒にフライデーロードショー見たじゃん。黒魔女の宅配便」

「確かにそうだったな」

ニコニコと俺の慌てぶりを笑う美世子は世界で一番可愛いと思う。

(鼻肩目に見なくても)

「じゃあ、なんで俺を起こしたのかな？」

美世子に負けないニコニコ顔で問い掛ける。

「え、えーとそれは……」

口をへの字にして必死に理由を探す。

その様子がなんだか小動物らしくて、例えるならウサギみたいな感じで、俺は小さく笑いをこぼしてしまう。

「えーと、えーと、えーと今日はお弁当がいらなくてーでもえーと」

「もう良いって。朝ごはん食べよう？」

美世子の頭に手をポンと置いて、わしゃわしゃを頭を撫で回す。

硬い美世子の毛は少し撫でただけでバサバサになり、野生児の髪型みたいになる。

「あゝ！髪の毛触らないでー！30分かかったのにいー」

プーと頬を膨らませ。手をグーに握って俺の頭をポカポカと優しく叩く。

「はいはい、後でくくつてあげるから」

叩く手を止めない美世子に叩かれながら俺は廊下にでる。

これが俺の毎日の日常。

そう、これから——

だったはずなのに

不知火家の朝食風景

トントントン――

ジュージュー

ガチャガチャ

居間には美世子が朝ごはんをつくる音が、空気を振動させて伝わる。俺の両親はこの白仙村みたいな田舎だと収入源がないため、町に出稼ぎに行っている。

そのため、朝ごはんや洗濯、風呂掃除買い物などはすべて俺ら兄妹がしている。

美世子は朝ごはんと買い物。俺は洗濯と掃除だ。

俺はとりあえず退屈しのぎに、と黒いリモコンを手にとってスイッチを入れる。

『……今日未明、××県××市の路上にて、××高校に通う女子生徒黒瀬有紗さん17歳が惨殺されているのが発見されました。近隣住民からは昨晚、有紗さんと何者かが取っ組みあいをしている声が確認され、その何者かが事件に関与しているとして、近隣住民から聞き取りをしています。有紗さんの遺体は顔面が鈍器で叩き潰され、足はすべて……』

ブチッ！

朝ごはんのときに見る内容でないと判断した俺は、乱暴にスイッチを切る。

後ろで料理をさらに盛り付けている美世子の方に顔を向ける。

きれいに盛り付けるのに必死なのか、下を向いたまま手を動かしている。

テレビを見た様子はなさそうだ。

俺の視線に気づいたのか、美世子は顔をあげてニッコリと微笑む。

その笑顔が可愛らしくて、慌てて目を逸らす。

食欲をそそるいい匂いが備考をつく。

ご飯の匂い。香ばしいウインナーの匂い。卵のやわらかい匂い。味噌汁の家庭的な匂い。

グウーとお腹が鳴りそうなのを妹の手前、必死で我慢して運ばれてくる料理に目をやる。

綺麗に焼き目のついててカニやタコに切り細工を施されたウインナー。
1。

綺麗に丸められた玉子焼き。箸で2つに割るとトロリとした白身や黄身があふれる。

ふっくらと盛られた白い白米。卵ふりかけが振りかけられていて食欲がそそられる。

極めつけは味噌汁。

まだ両親が出稼ぎに行ってなかったところにお袋が作ってくれた味噌汁と同じ具、同じ匂い。

懐かしさが心の奥からこみ上げてくる。

俺はSIZUOと彫られた黒い箸を手に取り手を合わせる。

そして作ってくれた妹に感謝をすべく、言葉を口に出す。

「いただきます」

「死んでしまえ」

朝食をとり終えた俺と美世子は居間でゴロンと寝転がる。

我が家は21世紀には珍しい旧家だから、床は畳。居間は庭に面していて障子で遮られている。

白仙村の家は八割こんな感じの家だから、特に古臭くて恥ずかしいとは思ったことはない。

むしろ、旧家のほうが過ごしやすい。

春は居間で桜が見れるし、夏は木の陰になっているところで昼寝をしたり庭で花火をしたり。

秋は木が色づくし、冬は………いいところが思い浮かばない。

でも、いいんだ！とにかく旧家がいい！！

今だって、畳の上で寝転がりながら庭で美世子が花に水遣りをしているところが見れる。

清楚な白いワンピースに身を包み、肩甲骨の当たりまである黒い艶やかな髪、白い細いすべすべの3拍子がそろった肌。

深窓の令嬢みたいなかんじで、ぶっちゃけるとなったら48に余裕で入れるかも。

いや、そんなところに収まるわけないよな。ミス日本？ミス地球？ミス宇宙？

とにかく、美世子は可愛い。

性格よし、成績よし、料理よし、もうこれは完璧に最強コンボじゃねえか。

絶対美世子はいい嫁になる。マジで。

……と思ってたのに。

何の前触れもなく、美世子が倒れる。

俺にはその光景がスローモーションに見えた。

いきなり、カラncカラncと乾いた音を立てて銀のジョウロが地面に落ちる。

まだ半分ほど残っていた水は遠慮なく、美世子の服と足を濡らす。

目を見開く俺の目の前で美世子の体は後ろに倒れる。

咄嗟に起き上がって裸足で走り出す。

が、手を伸ばしたが後一步のところで届かず、美世子の体は音をたてて地面に倒れる。

「美世子!!!!」

上半身を抱き上げて、名前を呼んでみても美世子は返事をしない。目を閉じたまま開こうとしない。

凍った血が足元からあがってくる。

ええと、こういうときどうするんだっけ。

朝礼で誰かが貧血を起こしたときは確か保健室……ってうちに保健室はねえよ!!!!

自分の無力が腹正しくなる。

早まる鼓動を押さえつけて、居間の中に運ぶ。

平均体重を少し下回る妹の体は楽に持ち上がった。

畳の上に寝かし、とりあえず冷蔵庫から氷嚢をもってくる。

ああくそ……!! なんでキャベツと合体してんだよ!!

いらだつ気持ちも鼓動とともに押さえつけ、台所にあった肉を切るハサミでキャベツを切り剥がす。

「う……」

小さく呻いた美世子の声に俺はすばやく反応。

ハサミをもったまま美世子のそばへ行く。

ぐったりとしながらも目は開いてて、とりあえず命に別状はなさそうだ。

「……………」

上半身を起こして氷嚢を額につけても無反応。
どうしたもんかな、と唇を噛んで思案にふける。

「大丈夫か？」

とりあえず月並みなことを訊く。

美世子は黙ったままハサミに手をやる。

ハサミをよこせ、と言いたいのだろうか。

刃を自分の方に持ち替え渡す。

この行動を俺は、後悔することになる。

渡してなければ結果的にあんなことにはならなかったのだから。

美世子の表情が一瞬にしてかわり、

「死ね！死んでしまえ！！」

普段の美世子からは考えられない言葉がでてきて、顔を怒りや恨みにゆがませて、俺に向かって、

ハサミを振り上げた。

刺さったハサミ

美世子に、刺された、

という事実は頭より先に体が気づいた。

今まで聞いたことがないような鈍い音が、空気を振動してではなくて体から音が伝わる。

条件反射で顔を刺された方とは反対の向きに顔を向けて目を硬くつぶる。

焼けるような痛みが肩を襲う。

目を硬くつぶって逸らしたって、痛みがマシになることはいっさいない。

でも、“美世子に刺された”という現実を受け入れたくない俺は目を逸らしたまま痛みに耐える。

「……へえ……これくらいの痛みには耐えられるんだクズのくせに」
美世子の口から出ているとは到底思えない、低く恐ろしい声が聴こえる。

今、どんな恐ろしい顔をしているのだろう。

きつと、普段の様子からは思いつかないような顔に違いない。

「ふっざけんじゃねえよ!!! あたしを殺しておいてよお!？」

“殺しておいて”その言葉にピクリと耳が反応する。

——殺して、おいて……？

「おまっ……!!」

口まで出た言葉を無理やり飲み込んで声を抑える。

——コイツ、美世子じゃない!

そう思うと、気が少し楽になった。

刺された傷口が痛いのはちっとも楽にはなっていないが、美世子じゃないということがわかればこっちのもの。

硬く閉ざしていた目を開き、ソイツを睨み付ける。

案の定、ソイツの顔は美世子とは似ても似つかない、正確に言えば美世子の特徴である三白眼以外、美世子との共通点は一切なかった。俺は、へし折るくらいの勢いでソイツの手をつかむ。

ソイツは今まで目をつぶっていた相手に反撃をされて、豆をくらったハトのように驚く。

その隙に、ソイツの鳩尾に蹴り！

余分な肉がほとんどついてないソイツ鳩尾を殴られると、ソイツは小さくうめいて前のめりに体を歪ます。

間髪をいれずに、後ろへ回って首筋に肘打ち。

首筋を打つ、というのは殺人技の一手前で、美世子には一生使う機会のない技。

でも、美世子の皮をかぶったソイツは別。

遠慮なく叩き込まれた肘打ちは予想以上の効果を発揮したらしくて、今度は呻きもせずに白目をむいて、ソイツは倒れた。

「……………肩縫ったりするのって整形外科だっけ？とりあえず白仙医科大学付属村立病院にいったら大丈夫だろ。ついでに精神科か心療内科に行ってコレを見てもらおう」

刺さっていたハサミを引っ抜いて畳に投げ捨てる。

血でべつとりと濡れたそれは音も立てずに落ちる。

美世子の体を寝かせて、そのそばに座る。

——肩にハサミが刺さった理由、どうしよう

刺さったハサミ（後書き）

昨日の観覧数が100pv越していた件につきましてw^p^
昨日観覧してくださった30余名の方々に深くお礼申し上げます。

あたしを殺した

「……美世子、大丈夫か？」

畳の上に美世子を寝かせ、頭に氷嚢を乗せる。

少し顔色が悪いところが気になるが、それ以外はとくにないから大丈夫そうだ。

それでも、再びソイツが現れるかもしれない緊張に体は硬くしたまま。

ソイツが出てきたら今度こそ手加減なしで（あれでも一応は手加減をした）ぶん殴ってやる。

壁にもたれて、フーと一息つく。

チラリと肩に目をやる。

消毒をして、包帯を巻いて応急処置をした。

本当だったら今すぐ病院にいった方がいいかもしれないのだが、美世子が目を覚まさない限り少し不安だから、美世子が目を覚ますのを静かに待つ。

その間に、さっきの出来事を反芻する。

——最初に美世子が倒れた。

——それで、助けに行ったら死ねって言われて、刺された。

——だから自己防衛のために殴って気絶させた。

それだけ。

それ以外にはとくに何もない。

「あ……う」

「お、起きたか」

美世子は目をこすりながら体を起こす。

すんなりと体を起こしたから異常はない。
トロンとした目つきで空を見つめている。

「大丈夫？痛いところはないか？」

そのとき初めて、俺に目を合わせた。

ドロンとした目は、俺の嫌いな、さっきの、美世子の、じゃなくて、ソイツの、ソイツの、目に

「……よくもさっきは……！！！！」

憎しみのこもった目で、俺の首に手をかけて、力をいれて。

——コイツ殺す気か！？

命の危険を感じて、ソイツの体を遠慮なく突き飛ばす。

ソイツの体は畳に倒れる。

首を絞められた、といってもほんの数秒だったため咳き込んだりはせずにすんだ。

ソイツはすぐに体制を立て直して次の攻撃にかかろうとする。

ただ、手近な武器にかわるものがないらしくて素手で攻撃をしようとしているようだ。

「ンだお前よオ。あたしを殺した上にまだ殺るっつうのか！？上等だ！かかってこいやあ！」

俺の攻撃をまたずに、ソイツが飛び掛ってくる。

紙一重でその攻撃を避けて反撃のために左腕で顔をぶん殴る。

そんな中、俺の頭の中にはひとつの疑問が浮かんでいた。

——あたしを殺した、って何だ！？

馬乗り

「……あたしを殺した？」

疑問符をつけて、ソイツに声をかけてもソイツは俺の言葉が耳に入っていないかのように拳を振るう。

確実に、致命傷を与えるように上手に鳩尾や顔を狙ってくる。

俺はそれをギリギリのところで避けながら反撃をする。

もちろん、手加減はなしだ。

美世子が目覚めましたら土下座せねばならない。

——お前を殴ってごめん。って。

それで、『もういいよ。』って苦笑しながら手を振る美世子の顔を思い浮かべる。

……なかなかいいな、それ。

思わず一瞬、頬を緩ませる。

「何にやけてんだよおおお！！！！？？？」

「おおっグボッ！」

その隙について、ソイツがさっき俺がやったように鳩尾に拳を叩き込む。

内臓的なものが出てくるような嘔吐感と、激痛が走る。

ドサツと音を立てて、俺は反動で畳の上に倒れる。

すぐに、ソイツは俺の上に馬乗りをする。

これが、美世子なら俺の海綿体は首をもたげていただろうが、あいにくこんなやつには反応しない。

「お前何？あたし殺しといて自分はノウノウと生きるつもり？ふざけんなよ！！！！」

これまで以上に目を、見開き俺の首に手をかける。

コイツは間違はなく俺を殺すつもりだ。

息が、できなくなる。

ソイツはさらに力を強める。

俺はなんとか逃げようとして、ソイツの手を必死で握り締めて足をバタバタと動かす。

でも、ソイツはそんなのお構いなしに首を締め付ける。

——ああ、死亡フラグだったな。

あきらめたとき、

「不知火さん！？大丈夫ですか！？」

廊下をドタドタと走る音がして、障子が開いた。

「！？静雄さん！？美世子さん！？」

白衣をきて、メガネをかけたその人は

「き……よ……さき……」

解離性同一性障害

目を開いて、最初に視界にはいったのは、俺の家の天井ではなくてやたらと白い天井だった。

目だけを動かして、違う場所を見る。

カレンダーと難しそうな本が置かれている。

あと、薬品のおいが鼻をつく。

布団をどかして体を起こす。

布団はよく手入れされているらしくて、真っ白でふわふわだ。起き上がると、肩に鈍い痛みが走った。

「いたっ……」

肩を見ると真新しい包帯が巻かれている。

ベッドから抜け出して、部屋の中を見回る。

スリッパはなかったから素足で動き回る。

「……白仙精神病院……」

机においてあったカルテに書かれていた言葉を読み上げる。

『白仙精神病院』

なぜか診療所といっしょにあるこの病院。

あまり精神病院が必要な人間はこの村にはいないので、経営が右肩さがりな病院だ。

でも、院長さんがいい人でわけもなく病院にくる人が多い。

なんて、考え事をしているとその院長さんが出てきた。

清崎圭介。年齢不詳の医者だ。

メガネ＋白衣＋黒髪というまじめな容姿からはあまり想像できないが、けっこうヘラヘラした人間。

「様子はどうか？ 静雄君？」

「……おえっ……さっきまではよかったですけど清崎先生がきてからいっきに気持ち悪くなりました。俺もう10代後半なんですから君はやめてください」

「そうですか。じゃあ君から静雄きゅんにしましょう」

この人には何をいっても無駄だと思い、話題を変える。

「……美世子は大丈夫ですか？」

そう訊くと清崎先生は机のところにあったイスに座り、どこからかカルテを出す。

ちよつと困った顔をして、唸りながら

「ちよつと……わからないですね」

予想通りの答え。

いきなり、あんなことをするような病気があるものか。
でも……と、清崎先生が口を開いた。

「……解離性同一性障害という病気が疑えます」

「かいりせいどういっしょうがい？」

「ええ。わかりやすくいえば二重人格です」

「んな漫画じゃあるまいし……」

冗談だと思ったが、清崎先生の目は本気。

まさか、妹が、

そんな漫画みたいなやつだなんて。

解離性同一性障害（後書き）

清崎先生の登場はあたしを殺したの後に病院って感じだったけれど、
なんか思うようにかけなくてこうなったw

愛がなせる技とやら

「……とりあえず、美世子さんの様子を見に行きますか？」

清崎先生の誘いに対して俺は迷わずに返事を返す。

百聞は一見にしかず。

まだ、一度もその病気については何も聞かされていないが、見たほうが早いだろう。

清崎先生はイスから立ち上がり、部屋を出て行く。

それに続いて俺も部屋を出る。

部屋を出ると、普通の廊下。

ただ、病院のポスターとか病気に関する雑誌。薬品のおいが充満していた。

休日なのに、廊下には1人も患者がいなくて、やはり白仙村には精神科などいろいろな様子。

廊下に響く音は俺と清崎先生のスリッパの音だけ。

——看護婦さんっていないのかな？

看護婦……いや、看護師さんがいるんだったらほかにも足音がするはず。

でも、音がしない。

「……今日きてくださってるのは1人。看護師の藍沢さんは美世子さんの傍にいますよ」

「……なんで俺の考えてることがわかったんですか？」

「愛がなせる技です」

……キモ。なんてこと、言えるわけがないので俺は返事を返さないで廊下を歩く。

さすがに、さっきの一言は不味かったのか少し間を置いてから清崎先生はそれっきり黙ってしまった。

廊下の先に、『特別室』と書かれたプレートが下がった病室がある。

窓ガラスからは、蛍光灯の光が漏れている。

興奮のせいかな、少し足が速くなる。

チラリと、清崎先生に目をやると、清崎先生は愛がなせる技とやらで俺の考えていることがわかったのか黙って頷く。

俺はそれを肯定と受け取り、さらに足を速くした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0372y/>

二重人格な妹と一重人格な兄

2011年11月17日19時12分発行